

二)。物品・数量を記した後に地名を書くのは珍しい。(15)は荷札に由来するとみられるが、上端以外は欠損する。(16)は二片接続で、上端折れ。下部には穿孔がある。(17)は完形荷札。塩を貢進することから、「田田」は後の紀伊国名草郡多田郷に該当するか。サト名の次に「五十戸」「里」を省略している。(18)は完形だが、裏面の墨書きは削り残り。「五丈」は上長押の長さで、割書きにはそれを組み立てる際に使用する釘の種類と本数を記す。付札状を呈した進上状で、地方からの貢進荷札ではない。(19)は上端折れ、下端二次的切断。「弟」は「廣人」の出身地とみられ、後の山城国乙訓郡に該当しよう。

一文字目は下部が「木」の字体で、「集」と訛読できれば、「物集國」は「廣人」の出身地とみられ、後の山城国乙訓郡に該当しよう。

村」の可能性がある。(20)は上端折れで、材の下部に日付と人名を記す。(21)は三枚をとじ合わせた檜扇の破片(上部欠損)で、最も外側の一枚に墨書きする。(22)は上端部の左右二箇所に径約5mmの小孔があり、その下に墨書きする。番付に関わるか。

9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇八』(二〇〇八年)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一一(二〇〇八年)

(市
大樹)



(桜井・吉野山)

北限・北域の土地利用状況は不明瞭な部分が多いが、
銅滓や銅製品、鞴羽口、板ガラス片、墨書き土器などが
出土しており、工房や雑舎

奈良・安倍寺跡

1 所在地	奈良県桜井市安倍木材団地
2 調査期間	第二〇次調査 二〇〇六年(平18)八月~九月
3 発掘機関	桜井市教育委員会
4 調査担当者	木場佳子
5 遺跡の種類	寺院跡
6 遺跡の年代	飛鳥時代~中世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	安倍寺は七世紀中頃に創建されたと考えられる古代寺院で、「東大寺要録」などから、阿倍氏の氏寺として建立されたと推定されています。(21)は三枚をとじ合わせた檜扇の破片(上部欠損)で、最も外側の一枚に墨書きする。(22)は上端部の左右二箇所に径約5mmの小孔があり、その下に墨書きする。番付に関わるか。

安倍寺は七世紀中頃に創建されたと考えられる古代寺院で、「東大寺要録」などから、阿倍氏の氏寺として建立されたと推定されています。(21)は三枚をとじ合わせた檜扇の破片(上部欠損)で、最も外側の一枚に墨書きする。(22)は上端部の左右二箇所に径約5mmの小孔があり、その下に墨書きする。番付に関わるか。

それでもその概略を捉えている。
要伽藍及び寺域の西限はほぼ確定し、南・東限について

9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇八』(二〇〇八年)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一一(二〇〇八年)

(市
大樹)

北限・北域の土地利用状況は不明瞭な部分が多いが、
銅滓や銅製品、鞴羽口、板ガラス片、墨書き土器などが
出土しており、工房や雑舎

が存在する可能性が指摘されている。

今回の調査地は安倍寺跡の推定寺域の北縁部に位置する。約八〇²m²を調査した結果、藤原京期から平安時代の遺構を検出した。

木簡は、調査区西側で検出した南北溝SD〇三から一五九点、削屑約四〇〇点が出土した。溝SD〇三は幅四・五m以上、深さ約六〇cmを測る。遺構の時期は七世紀末から八世紀初頭と考えられる。

埋土は五層に分かれ、層ごとに分けて遺物を取り上げたが、各層に顕著な時期差は認められなかつた。出土遺物は他に、土師器、須恵器、軒瓦を含む丸瓦・平瓦、木製品、円面鏡、土錘、漆膜の付着し

た土器片、漆塗りの木製鉢片、「□寺」などと墨書・刻書された土

器片、製塙土器、和同開珎、鉄釘、鞴羽口、トリベ、鉱滓、滓の付着した土器片、銅滴、ガラス玉などがある。

8 木簡の积文・内容

SD〇II 二層

(1) □百七十一別塔作

091

(2) 「▽久比廿五□□」

・「▽□□」

113×22×2 032

(3) 「在在在在在在」

・「□□木□」

157×14×5 081

SD〇IV 三層

(4) 「▽四十□」

91×20×2 032

SD〇III 四層

(5) 「上稻千冊上」

92×20×3 011

(6) 「□□□人十束三□」

・「□□□馬大大大皮皮
〔白大カ〕〔水カ〕」

(235)×(14)×2 081

SD〇III 埋土一括

(7) 「▽三尺五□尺□」

(93)×19×5 039

(8) 「□十九斤 其四斤□□」

(129)×(19)×3 081

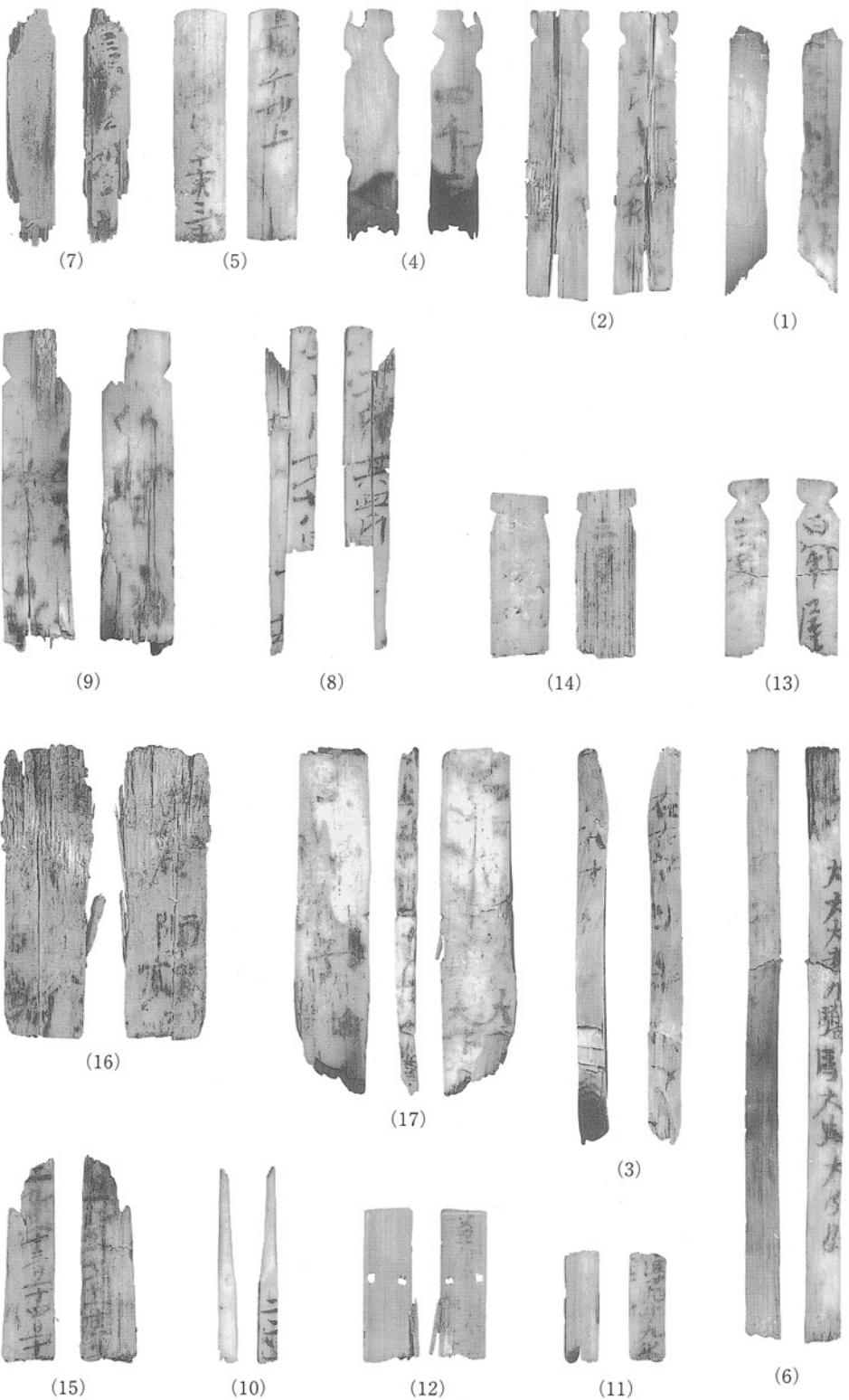
・「□□□廿八日□□」

(128)×28×4 039

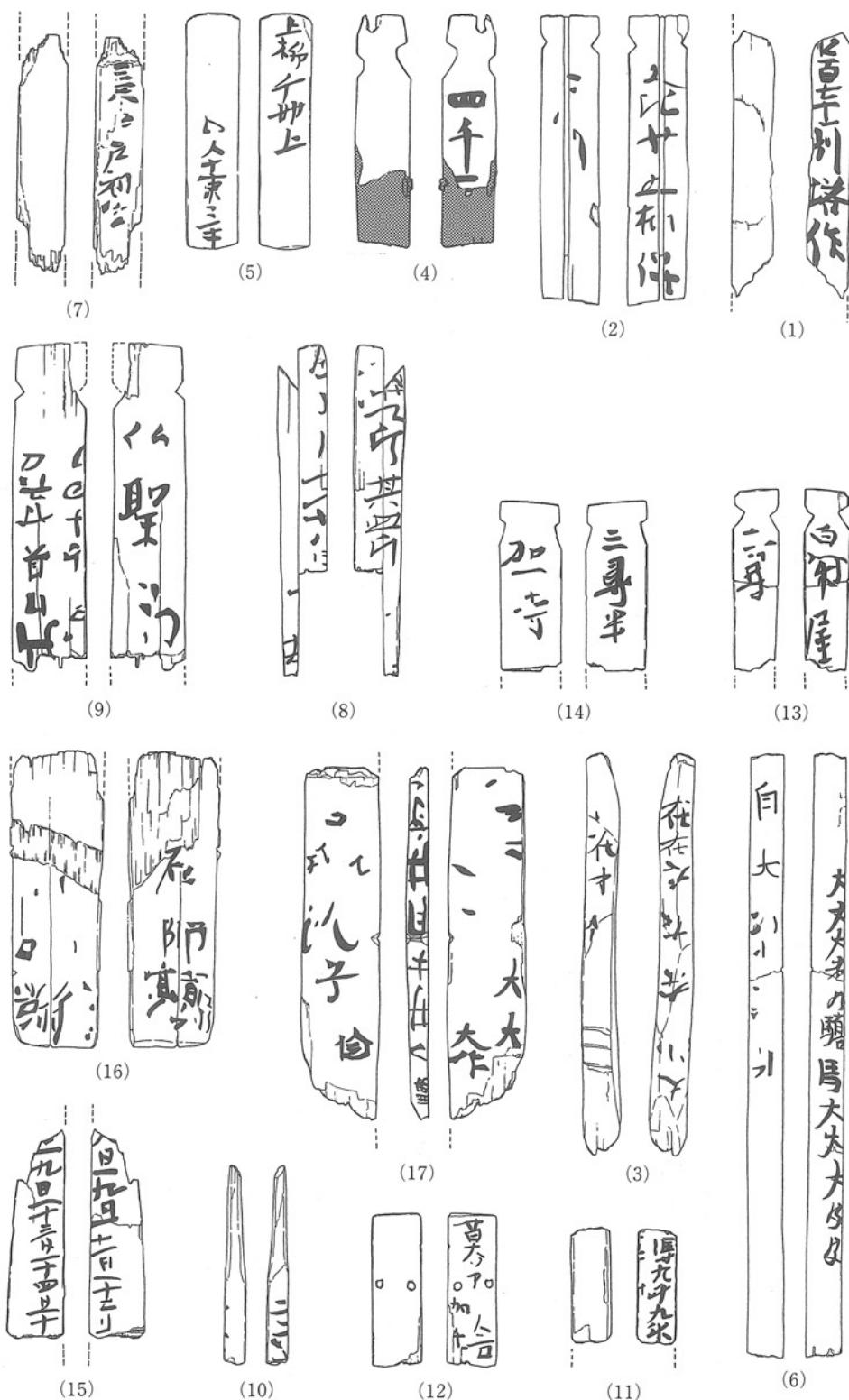
(9) 「▽仏聖□」

・「▽□□井其□□六□」

(78)×8×7 081



2007年出土の木簡



(11) □九斗九升

(45)×(15)×5 081

「廿日大□□^{〔マカ〕}□人一□」
○加□□

60×19×2 011

(12)

・「△白閣屋
・「△□□□

(71)×18×2 039

(13) •「△□□□
•「△□尋半

(65)×24×2 039

・「△加□□

(65)×24×2 039

(3)は右辺のみ原形をとどめる。裏面には薄く削いだ痕跡があるの
で削屑である。墨痕は極めて薄いが赤外線装置により読み取ること
ができる。「□」とあるので「百七十一」は人の数を示すとみられ、
次いで「塔作」とあるので塔などの伽藍建立に関わった作業員の人
数を記した木簡の一部とみられる。この木簡から考へると、塔の造
営は天武朝から藤原京期にかけて行なわれた可能性がある。

(2)は上端に切り込みをもつ完形の木簡。表面の「久比」は不詳。
五・六文字目はそれぞれ木偏・人偏の文字である。裏面は非常に墨
痕が薄いため釈読できない。

(15) •八日一九日一十一日一十一日
〔日カ〕
□一九日一十一日一十四日一十

(81)×(22)×4 081

(16) •□石 師□□

(81)×(22)×4 081

(4)は上端に切り込みをもつ完形の付札木簡。下端には漆が付着し
ており、そのまま範に転用されたらしい。「四十」とかなり大きな
数を記すが、それが何の数であるかはわからない。

(5)は完形の短冊型木簡。上端及び下端はやや丸く整えられている。
一字目は筆の運びからすると「柳」のようにも見えるが、裏面の
「十束」から考えて「稻」と釈読した。この木簡も「千冊」とかな
り大きな数を記す。「上」は進上の意か。

(6)は上端及び左辺は原形をとどめ、右辺は割れ、下端は折損する。
墨書は両面にあるが、裏側は非常に薄く釈読困難である。習書。

□□#□□#□□ (側面)

(138)×(29)×9 081

(17) •□大 大
•□大 作
〔乙カ〕
□□□子

(117)×(33)×5 081

墨書は両面にあるが、裏側は非常に薄く釈読困難である。習書。

(7)は破損が激しいが、上端の一部に削り整形の痕跡があり、上端左右にも切り込みの一部とみられる痕跡が僅かに見え、荷札木簡である。下端部は折損している。「三尺」の下はやや墨痕が薄いが、「五十戸」とみてよい。三尺五十戸は「ミサカノサト」であり、『和名抄』には武藏国横見郡御坂郷・備後国神石郡三坂郷・筑前国穂浪郡三坂郷がみえる。里ではなく五十戸と表記することから天武朝後半以前の木簡と考えられる。

(8)は二片が接合するが、原形をほとんど残さない。破損状態が不自然なことから、木簡の廃棄段階で人為的に破碎されたと見られる。

一九斤あるもののうち、四斤について何かを行なった記録木簡か。

(9)は上端に切り込みがある付札。切り込み部分には紐の痕跡が残る。下端は折損する。墨書は両面にあり、裏面は天地を逆にして記す。「仏聖」は「仏餉」と同じで仏前などに供える米飯であろう。

(10)は上端は二次的加工により細長く削る。下端は折損。

(11)は上端折損、右辺割れ、下端部は断面逆字形に表裏両面から刀物を入れて切断する。「九斗九升」と大きな量を記す。

(12)上下両端、左右両辺とも原形を残す小型の木簡。中心の左右に穿孔がある。上半部は「廿日」と一行で記し、下半部は二行に分けて記している。これと同様の木簡がもう一点ある。

(13)は上端は原形をとどめ、切り込みをもつ。下端は折損。二字目は「マロ」と訓み、七世紀の木簡によく見られる人名表記である。

(14)は上端及び左右両辺は原形をとどめる。上端左右には切り込みがあり、紐の痕跡が残る。下端は切斷されており、二次的加工の可能性もある。墨痕は両面ともかなり薄い。

(15)は上下両端は折れ。左右両辺も割れていて原形を残していない。日付を順に記し、各日に確認のための合点を付した木簡である。なお、この合点らしき墨痕は界線の類の可能性も残る。

(16)は下端と右辺が原形をとどめ、左辺は割れ。上半分は表裏両面とも破損が激しい。全体にやや大きめの文字を記しているが、内容はよくわからない。

(17)は上端及び下端は折損し、側辺は片側のみ原形をとどめる。側辺の中央には正面と左右の三方向からの切り込みがある。文字の配置に規則性はなく、また同じ文字を繰り返していることから習書木簡であろう。

なお、木簡の釈読にあたっては、京都教育大学（当時）の和田萃氏、奈良県立橿原考古学研究所の鶴見泰寿氏のご教示を得た。

9 関係文献

桜井市教育委員会『桜井市平成18年度国庫補助による発掘調査報告書』（桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書三〇、二〇〇八年）

（木場佳子）